

特集

小児・新生児領域の医原性疾患の画像

Imaging of iatrogenic disorders of the neonate and child

特集を企画するにあたって

与田 仁志

日本赤十字社医療センター 新生児科部長

Hitoshi Yoda

Department of Neonatology, Japanese Red Cross Medical Center

本号では特集で「小児・新生児領域の医原性疾患の画像」を取り上げた。医療技術が進めば進むほど、これまでに見たことのない医原性疾患に出くわす。それは時に致命傷になることもあれば重篤な後遺症を招くことにもなる。予想しない事態であるからこそ当事者には気づくことが困難で、第三者による指摘で医原性疾患と気づく。そういう意味では医原性疾患に対する画像診断と放射線科医の役割は極めて大きい。

小生が小児科医になり、NICUという比較的処置の多い部署に勤務した時の頃、図書館で出くわした書籍で見た医原性疾患の数々は医療行為に潜む危険性を十分に教えてくれた。Kassner EG 著 Iatrogenic disorders of the fetus, infant, and child. (1985年 Springer-Verlag)であったが、その後、実際にそのような医原性疾患に出くわすことも何度かあった。自分で招いた事態は自分で收拾したい思いで復元に努めたが、全て解決したとは言えなかった。最近では単純X線写真以外にも超音波検査、CT検査、内視鏡で診断されることも多い。しかし基本は単純X線写真であり、それが医原性疾患診断の契機となって重篤な症状を来す前に診断することも可能である。もし臨床症状が先行しておれば、もう一度単純X線写真などを振り返っ

て見直すことも重要である。

本特集の内容は「医原性疾患の画像」を身体部位別に、1:頭部、2:胸部、3:腹部、4:血管に分類した。やはり、どの部位をとっても、カテーテルやチューブ留置にまつわるものが多くを占めたが、医原性疾患を取り扱う場合の特性が出た極めて貴重な内容で、一読の価値のあるものとなっている。自分では経験したくない医原性疾患であるが、その画像や解説を熟読していただければ模擬体験として身に付くことは間違いない。執筆はそのような医原性疾患の診断経験が豊富な放射線医にお願いした。施設の名誉のために前置きしておくが、執筆者らの所属する施設で医原性疾患が多い訳ではない。むしろ、困難な医療行為を行えば行うほど経験値が高まるという医療実践の原則を説くものであり、よりactiveな医療を行っている証左と言える。本学会でも時に医原性疾患の報告はあるが、会員への啓蒙よりも羞恥心が先行してか、そう多いものではない。そういう意味でも、本特集は学会発表ではなかなか聞けない貴重な体験談である。しばしば臨床医が痛恨の思いで経験する医原性疾患を題材に、臨床と画像診断の深い結びつきを再認識する機会としていただけると有り難い。